

---

# 打ち碎かれたプライド

Kazuya2009

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

打ち碎かれたプライド

### 【Zマーク】

Z7019H

### 【作者名】

Kazuuya2009

### 【あらすじ】

女顔だから女装をさせてミスコンに出してみよう。そんな恐ろしいイベントに出させることになる文也。こんなイベントをしたことを後悔させてやる！彼は完璧な女へと変貌を遂げる。女装でミスコン？お笑い間違いなしの作品です！

## 第一話・女装で//スローネー?（漫畫セ）

お馴染な作品なので、気楽に見てやつてくれ。こ。

## 第一話・女装でミスコン！？

ある高校の文化祭。

誰が言い出したのか分からぬいが、とんでも無い企画をしてくれていた。

ミスコンテストに女装した男を入れてみよつよとの事である。

「俺が女顔だからってふざけるなよ…」

俺は思いつきりジト田で文化祭委員長をこらみつけてやる。

「いいじゃん。文也、可愛いし」

文化祭実行委員長。小西妙子。俺の幼馴染だった。

「だから、嫌なんだよ…」

そう。

俺は女顔だった。

普通、年齢を重ねれば男らしくなるもんだが、俺は最悪なことに高校一年になつてもまともな成長期が来てない。

そのせいか、脛毛も生えてなくて小学生みたいな足をしている。だからつて妙子のやつ、突拍子も無いことを言いやがった。

「てか、もう提出して通つてるんだ」

「アホか！ 今すぐ取り消せ！」

「い・や」

俺はこの時本当に頭がいたい思いをした。

ミスコンテストに女装なんて絶対にありえないし、やっちゃんいけないだろうが！

それが許可されたなんて先生達もどつかしてるよ。

「そんなわけなんによろしく…」

「あ、おい！」

スキップでもしそうな程、軽やかに去つていく妙子。

俺は大いに悩んでいた。

そして文化祭当日。

俺はこの馬鹿げた企画に喝を入れることにした。  
思いつきり女装してやるつてことだ。

実は俺の親戚にはメイクアーティストがいる。  
当然、女装とかの依頼もありこなしている訳だ。  
そう、俺は誓った。

こんな馬鹿げたことをするのは俺をコケにしようとするからだと。  
ならば、その自信を碎いてやるさ。

そんなわけで俺は親戚を呼んでおいた。

それと、どうせやるなら本格的にやると先生にも伝えて、部屋を  
一つ用意してもらつた。

コンテストは参加してもらいたい人を当田まで三三三まで選んで  
もらつ。

そこから上位五名が体育館の舞台に立つてもらい投票だ。  
服装もおのの用意して最高に飾ることになる。  
で、俺はすでにエントリーされている。

ちなみに投票は更正に行われるため、俺にも票が入るのだ。  
友人にも馬鹿にされて本当に辛い一週間だった……。

「文也、本当にいいのか？」

親戚の兄さんが俺に最後の確認を取つてきた。

俺は頷くと、兄さんも分かつたという。

「今日は最高のメンバーをそろえてある。衣装もバツチリだ。お前  
を最高の女に仕立ててやるぞ。な！ みんな！」

兄さんが振り向くと今回手伝ってくれるメンバーの人たちが雄た  
けびを上げた。

メイクアーティスト、スタイルリスト、特殊メイクアーティスト。  
全員が一致団結。

プロとして、そして仲間の身内のためにと最大の力を發揮してくれた。

仕上がった姿を見た俺は……。

「やばい、自分を襲いたくなる…」

そんなことを口走つてしまつた。

頭はウイッグを付けて、腰まであるロングヘアになつてゐる。顔は元々が女顔だつたんだが、それに輪を掛けるようにメイクで綺麗になつていた。

胸はシリコンで医療用の接着剤で付けて、肌の色に塗ることで本物そつくりに仕上がつていた。

服装は純白のドレスだ。

女性なら誰でも憧れる。

まさか俺が着る事になるとは思わなかつた。

胸元も開けていて、作り物の胸元が見える。

柔らかい雰囲気をといふことで塗られた口紅で、口元が少し薄い印象になつた。

「完璧だ」

「俺達の完全勝利は間違いない！」

兄さん達が力強く吼えている。

俺もこれなら負ける気がしなかつた。

そして、体育館。

一人ずつ舞台に出て行つて喝采を受けていた。

最後が俺の番である。

ここに来るまで他の人に見られるわけには行かないため、メンバ

ー全員で俺の姿を隠しながらここまで来た。

正直、衣装が衣装でなかつたら護送される犯罪者である。

「それでは、最後に男性代表の飯塚文也君に登場してもらいましょう。どうぞ！」

体育館内に笑いが起きる。

そりゃそうだろう。

男がミスコンテストに出るのだから。

だが、笑いは一瞬で収まつた。

俺が純白のドレスに身を包み。

しかもブーケまで持つて現れたのだから。  
そしてざわめき。

誰だ、あいつとか、あれが男？とか聞こえてくる。  
すでに舞台に出ている女の子も啞然として俺を見ていた。

「綺麗だね」

女子の誰かがそういうと、そこら中から綺麗だという声が上がり  
てきた。

男子と男の先生なんか俺に見とれている。

「そ、それでは投票を開始したいと思います」

司会の人があの「う」と配られた紙に名前が書き込まれた。

結果から言えば俺の圧勝だった。

佐々木裕子・四九票。

山田聖子・三四票。

岡えみ・三七票。

富山明美・三一票。

木島亜里沙・四一票。

そして。

飯塚文也・二八九票。

文句なしである。

「今年度のミスコンテストは…」

俺の名前が呼び上げられたとき、男性陣から異様なまでの喝采を  
俺は受けることになった。

ちなみに翌年から、親戚の兄達による女装最高チームが作られ、  
ミスコンテストに男性を入れることが定番となってしまった。

そのせいで翌年から女子がミスコンテストに選ばれる「ことはなく  
なつた」という。

何せ、男性票が全て女装した男子に行つたのだから。

教訓。

面白がって女装をせるのはやめよつ。

by：女子生徒一同。

おまけ。

その後、俺にはファンクラブが出来た。  
だが、正直嬉しくない。  
何故なら…。

「お姉さま！」

「あ、お姉さま… クッキーを焼いたんですけど食べてもうれませんか！」

「わたしはチヨコレートを…」

下級生の女の子が作ったファンクラブ。  
文也お姉さまファンクラブなのだ。

「だから、俺は男だあ！－！」

俺の絶叫が今日も校舎に響き渡った。

## 第一話・女装でミスコン、まさかの「年田ー」?

ミスコンテストに女装した男を入れてみよつ。

そんなふざけた企画から一年がたつた。

俺は…女装に嵌つてしまつた。

つてことは無く、到つて普通の男子高校生をしていた。

ただし。

「お姉さまー 今年も文化祭で女装されるんですかー？」

「お姉さま、今年はミスコンの後で記念撮影を…」

などと、捲くし立てられると言ひひとを除けばだ。

「あれは去年だけの企画なんだし、俺はやらんぞ」

期待の眼差しを向けられながら、俺はそう答える。

しかし、やりたくないくとも強制という言葉もあり…。

「文也！ 今年もミスコンで女装の許可が取れたからよろしくねー」

妙子のやつがそう叫びながら俺の前を走り去つていく。

「は？ おい！ またか！ またなのかなあああ！」

俺の絶叫は親戚の兄まで届いたそうだ。

つて、そんな訳ないだろ！

「ああ！ お姉さまの女装姿がまた見れますー！」

お姉さまの女装姿つておかしくないか？

「わたしは先輩から見せてもらつた写真だけで、実物を見るのは始めてですー！」

あー、言つておくのが最悪なことに俺は写真、まあ写メを下級生の子達に取られていたのだ。

しかも事もあろうに今年入つて来た新入生にまで広めてくれたのだ…。

ちなみに、バレンタインの時は昨年までチョコ〇〇個だったのに対し、八〇個のチョコをもらつた。しかも手紙つきでだ。

内容は全て、俺の女装に感動したこと。

自分もあのよろに綺麗になりたいとかなど、到底男として喜べない内容だった。

いや、それ以前に男がお姉さまってどうなんだよ…。  
正直、泣きたくなつてくる。

「俺つて、男として情けなすぎる…」

俺はそう肩を落とすしか無かつた。

再び、文化祭。

しかし、やるからには俺だつて本氣だ。

一応、昨年のグランドチャンピオンは俺なのだ。

この座を明け渡す気など、勝負事である以上は絶対に許されない！  
そして、今年は女子も気合の入れ方が違うのだ。

昨年、思わぬ大差で負けてしまった女子達。

女子の威儀を保つために、俺に対して全面戦争を仕掛けてきたのである。

俺が参加することは学校公認になつてしまつていた。

だから、女子は俺に打ち勝てる美少女を本気で人選、最強の女子として戦場に送り出されるのだ。

そのために今年のミスコンはタイマン勝負になつてしまつ！  
つて、ミスコンのタイマン勝負つていいのだろうか…？

「文也、本気だな」

そういうのは昨年以来した親戚の兄だ。

「当然じゃないか…。男としては悲しいところもあるけど…、勝負事ならこのチャンピオンベルトは渡さない！」

実はミスコンの優勝者はティアラなのだが…。気分はベルトである。

「文也…。お前は立派な奴だ。今年も絶対に勝てる衣装とメイクで立ち向かう！ お前は女の中の女だ！ な！ みんな！」  
振り向く先には昨年以上に増えたメンバー達だ。

増えている理由は、なんと昨年の出来が良く、たまたま外部の中に女装方面に携わる仕事の人があったのだ。

それで年間に一〇〇人を超す男性に女装を施すカリスマ的集団と化していたのだ。

前回は男しかいなかつたメンバーに女性が入っていた。

その女性達によつて、細かいチェックが入る。

それで輪をかけて評判がうなぎ昇りらしい。

そして、そのメンバーの人たちが昨年同様に雄たけびを上げていた。

昨年同様に、シリコンで作つた付け乳房が俺に付けられる。

これは昨年の改良版で、サイズがいろいろとあるらしい…。

誰だ、こんな馬鹿なもの作つた奴は…。

今年のメイクは少しきつめである。

きつめと言うのは濃いわけではない。

こう、攻撃的な雰囲気を持つてかつ、色っぽさを出してた。

「…。なればまさにお姉さん風である。

…。ますます俺つて男離れしていくな。

髪の毛は昨年同様ウイッグ着用。

だが、ストレートのままではない。

一度頭の上で団子を作り、残りはボーネールっぽい感じだ。

…。この感じはどこかで見たような。

そう思つていると留めに衣装を身に着ける。

「…。俺つてこんなに色っぽくなるのか」

「ああ、男の俺としてもお前に惚れそうだ」

いささか危険な会話が交わされる。

俺の着た衣装は…青のチャイナドレスだった。

攻撃的なメイクはこのため。

口紅は昨年と違つて色の濃い赤だ。

真つ赤な口紅で強調。しかし、太くならないよう唇の全てに塗  
られているわけじゃない。

昨年より背が多少伸びたこともあり、もともと細身の俺も手に云つてすらつとしている。

スリットも大胆に腰の辺りから俺の脚が伸びている。

これがまた魅惑的になってしまっていたのだ。

「あー、兄さん。この[写真]ちょっと取つてもうつていいか?」

「あ、ああ。ちょっとこれは残しておきたいかもな」

と言つ事で俺は兄さん達と記念撮影を取り出した。

つて、本来の目的を忘れている。

「じゃあ、そろそろ時間だから俺は行くよ」

「わかった。護送はどうする?」

「女性の人たちを何名かつけてもらえる? 男だと…何かみんなの目が怖くてさ」

少しだけ血走った感じのメンバーを見て、俺は少しだけ恐怖感を感じた。

男でありながら襲われそうな…。

いや、男だからこそ襲われそうな気がしたのだ。

そして決戦の時が来る。

今回は俺と今年入ったばかりの新入生の子の一騎打ちだ。

まずはグランドチャンピオンである俺の登場だ。

体育館の裾から登場するとスポットライトが俺を照らす。

俺の姿に、男性陣から驚きとも歓喜とも言える雄たけびが聞こえた。

そして、ファンクラブの子達の黄色い声援。

「お姉さま! 素敵です!」

「お姉さま、お姉さまああー!」

「わたし、感動で氣が…」

のようにて反應は予想以上だった。

ちなみに倒れた女の子の数は一〇名ほどだった。

中には歓喜に涙を流す子までいる。

…ちよつと退くぞ俺。

ちなみに男性陣からもネットネトした声援が…。

「文也あああ！ //スコン終わつたらサービスしろーーー！」

「俺と記念撮影だー！」

「飯塚！ 俺にサービスせんと卒業せんぞおおおー！」

など。

今、卒業させないとか言つた教師はクビだクビ！

男の視線がここまで怖いと思ったことは俺は一度もなかつた。これが終わった後、急いで元の姿に戻ないと身の危険を感じる。

…。

そして、次に女子の登場だ。

俺とは反対側から登場する。

俺が赤コーナーなら向こううつが青コーナーというわけか。

登場した子は、昨年の俺ほどではないが綺麗なドレスに身をまとつていた。

腰までのストレートヘア、嫌味の無いメイク。

ドレスは胸元からしかないタイプだ。色は薄いピンク系である。

スカート部分もストレートで、俺のチャイナドレスではないが若干のスリットが入つていた。

そして何よりもその顔は俺もドキッとするほど可愛い子である。まあ、昨年の俺よりは劣るがな…。つて、自分で言つて悲しいな。

そして、登場した女子にこれまで俺とは違つた声援が。

まず女性の声援。

「由美子おおお！ わたしたち女子の威厳の復活をおおおーー！」

「由美子おー！ 昨年のわたしたちのあだ討ちを……」

「絶対にミスコンを奪取するのみーーー！」

という具合だ。

そして男子。

「これはこれでいいな」

「清楚つて感じがする。お付き合にしてくださいって感じだな」

「つむ。あの可愛さだけで卒業させてやる！」

おい、卒業させてやううなどとほざく教師を誰かクビにしろ！  
あれは危険人物だ！

「さて、両者がそろつたところで、まずは文也君に中央へ行つても  
らいましう！」

その言葉に周りが興奮の雄たけびを上げた。

今回からはファンクラブのようすに中央に道が出来ていて、  
そこで一度ポーズを決めてこの場に戻つてくるのだ。  
…。何か昨年と雰囲気が全然違うよな。

俺は中央に進む。

歩き方などはメンバーの女性に教えてもらつた。  
すっかり女性の歩き方をマスターした俺はその姿を披露する。

会場からはため息が漏れていた。

そして、中央でのポーズを取り戻つてくる。

その後、送り込まれた女子も同じようにして戻ってきた。

「それでは投票を！」  
運命のときである。

今回も結果から言えばやはり俺の圧勝だった。

投票結果。

飯塚文也・三一〇票。

石川由美子・一五〇票。

どうやらファンクラブ効果があつたらしい。

俺に男子全部の票とファンクラブの票で俺の圧勝に終わつてしまつたのだ。

ちなみ、女子はファンクラブ以外の子達が全員石川さんに投票していらっしゃい。

「今年度のミスコンテストは…」

再び俺の名前が読み上げられ、男子の身を切り裂くような雄たけびと、ファンクラブからの黄色い声援に包まれた。

俺は女王として…ではなくチャンピオンとして一連覇を果たしたのであつた。

女子達は落胆して体育館を去つていく。

気の毒だが、戦う以上は負けるわけには行かないのだ。

おまけ。

その後、ファンクラブは一年、一年の女子たちが大勢、加入するという異常な事態に陥つた。

教室を一つ用意されて、加入希望者を募つたところ、六〇名ほど

の列が出来上がつたらしい。

ちなみにファンクラブの既存会員の数は八〇名。

今回ので俺はますます人気になり。

「ますます、お姉さまを好きになりました！」

「はじめて、生で女装を拝見しましたが、感動です…」

「わたしもお姉さまのように美しく…」

と再び嬉しくない事態に陥つてしまつた。

「だから、俺は男なんだってばあああ…」

俺の叫び声は今日も校舎に響き渡つた。

教訓。

本気を出しきると、えらい目に逢つ。

By : 飯塚文也。

さらにおまけ。

その後、俺は高校を卒業した。

卒業式の日にファンクラブの子が泣きついてきて大変だつた。

それも今ではいい思い出である。

保護者からの冷たい視線と他人扱いする親父達の態度が痛かつたのは堪えた。

なお、俺が卒業するとファンクラブは新たな進化を遂げていた。

文也お姉さまファンクラブは名前を変えて、女装男子ファンクラブと…。

名前はいせきか変ではあるが、扱いは俺と同じになつたらしい。ああ、女装する男は哀れだ。

「俺は男なんだああ！」

今日もまた悲しい男子生徒の叫びが校舎に響き渡つてゐる。

## 第二話・意志を継されるもの

俺の通う高校にはとてもなく恐ろしいイベントが存在していた。何でも三年前から始まつたらしい…。

今年入学した俺にとつて、これはとてもつらいイベントだった。「そういうわけでな、杉田君。君が今年の代表になった

「そ、そんな理不尽です！」

「これは理事長も御認めになつていることなのだ」「ですが！」

「君には拒否権がないのだよ。杉田君」「つく…」

俺に出来る事と言えば拳を握り閉めるだけだつた。

俺が可愛いからミスコンテストに女装して出場なんて…。酷い仕打ちだ…。

こんな学校：入学しなければ良かつた。

その後俺が連れてこられたのはある教室だつた。

「杉田祐介君だね？」

そういうのはとても綺麗なお姉さんだつた。さすがに俺もドキッとしてしまう。

「女装、いやなのか？」「え？　あ、はい」

綺麗だけど、話しが男っぽい？

「さすがに俺のときと違つか」「え？　俺？」「え？　俺？」

「そ、俺、男だよ？」

「え？　えええええ！」

俺は目の前の女性…じゃない。女装した男の人には大声をあげていた。

そして、このミスコンの何たるかを男の人に教えてもらつたのだ。

文化祭当日。

俺は文也先輩に教えてもらつた。

女装で女子を倒すべく戦いに参加する意義深さに。そして感動した！

男でもあそこまで綺麗になれるなんて！文也先輩はまさに女の中の女だつた。

「祐介君。準備はいいかい？」

「あ、はい！ よろしくお願ひします！」

俺の前には総勢一五名に上るメイクアーティスト集団。その中には女装した文也先輩がいた。

俺を勇気付けるために、わざわざ今日女装してくれたのだ。しかし、文也先輩の人気は凄かつた…。

あの日、教室から出ると文也先輩のファンの女の子たちが殺到して大変だったのだ。

文也先輩はそれでも威風堂々として女子たちにサインをし、一緒に写真をとつていたのだ。

あの時、畳然としてしまつたが、俺も文也先輩のように堂々したいと思つた。

もう女顔とか言つて馬鹿にされたくなかった！

回想している間に、俺のメイクなどの女装が終わつた。

「うわ…」

俺は鏡に映る自分を見て赤面してしまう。

目の前にいる美少女は誰だ…つて。

だけど、これが自分だと認識すると俺は武者震いを起こす。

「どうだい？」

文也先輩が俺の肩に手を載せて尋ねて来る。

「す、凄いです！ 俺ってこんなに可愛いんですね！」

自分で言つて悲しいけど、そう俺は極上に可愛いのだ。まず、ウイッグで髪の毛でロングヘアにする。

化粧は薄めがいいと聞いていたが、少し化粧をしただけで俺は別人だった。

唇は薄い赤の口紅がうつすらと付けられている。

胸は何でも特別製の付け乳房。だけど、よりリアルに作られて感触までリアル。

ただ女人の胸を触ったことないからこれが本当かは知らないけど。

で、大きすぎず小さすぎない程度になつていた。

とどめは服装である。

「今日は基本に立ち返ったシンプル・イズ・ベストだ!」

そういうのは文也先輩の親戚のお兄さんだ。

お兄さんは拳を握り締めて叫んだ。

「テーマは、草原の美少女だああ!」

「ううドードーン!!」と効果音がありそうなくらい気合が入つっていた。

そう、俺の格好は白いワンピース一枚だけである。  
髪は日本人らしく黒! その黒いロングヘアがすらりとしていて、見事なまでに綺麗に仕上がっている。

少し動いただけでサッと髪が揺れて、また元の鞘に納まつた。

「俺：負ける気がしないです!」

「そうだろう。そうだろう

文也先輩は満足そうにうなづいていた。

そして舞台は決戦の地、体育館。

何でも文也先輩がやり過ぎたために、昨年から女子との一騎打ちになつたらしい。

女子は女子だけで予選が行われて厳しい戦いを勝ち抜いた美少女が選ばれているらしい。

それだけにとても厳しい戦いが予想されると文也先輩が言つていた。

「緊張するか?」

文也先輩が隣で俺の肩に手を載せる。

「さ、さすがに」

「まあ、舞台に上がつたらそのときだけは優越感に浸れるから大丈夫だ」

そして、場内アナウンスが流れれる。

会場では歓声が。

「”それではただいまより文化祭恒例となりました。男子も参加！ミスコンテストを行います！”」

司会の人人がそういうと会場は割れんばかりの歓声に包まれる。体育館が…揺れている。

「先輩、凄まじいんですね…」

「こんなの序の口だ」

「”まずは女子代表の飯田ひよりさん…”」

こうして俺のミスコンテストデビュー戦に巻くが上がる。飯田さんの登場に女子側からの歓声がヒートアップする。

「飯田！ 今年はあなたに女子の威儀を頼んだわあああ！」

「あなたはジャンヌダルクよ！ 革命起こすのよおおお…」

「全てはあなたのガツツで決まるのよおおお」

…。女性の応援は凄まじい。

これほど女子が怖いと思つたことはない。

「”そして、今年からは新たに女装してくれる杉田祐介君…”」

「気合を入れて行つて来い！ この一ヶ月の訓練でお前は女以上の女だ！」

「はい！」

俺は文也先輩に気合を入れてもうつて体育館の裾からおじとやかに歩きながら登場する。

スポットライトが俺に当たつた。

その瞬間、大歓声が上がる。

「うおおおおお… 超可憐だ！ お前… これ終わつたら俺の教室に来い！」

「俺たちがお前を可愛がつてやるぞ！……！」

「祐介！！ 後でサービスだあああ！！！」

……。先輩が言つていたとおりだ。

男子の声援は自分の身が危険だというのを教えてくれるつて。ああ、母さん。俺、男の恐ろしさを今知りました。

男はあまりに野蛮です！

そして、女子側からも歓声が。

「祐ちゃん、可愛いいいい！！！」

「お、お姉さまの復活ですか！！！」

「ああ、またこの奇跡を見れるなんてええ！！！」

「お姉さまと呼ばせてください！！！」

……。」「これが文也お姉さまファンクラブの声援！？

凄い黄色い声援だ！

これはもう一〇〇人力だぞ！

「”それではまず、ひよりさんから中央へ！”」

この後、ひよりさんが中央へ行つてポーズを何回か取ると戻つてい来る。

俺も同じようにして中央へ行つた。

そこで男子を落とすためのポーズと、ファンクラブの子達を落とすポーズをそれぞれ決めて戻ってきた。

結果は俺の勝利に終わった。

飯田ひより・一二五票。

杉田祐介・一七五票。

圧倒的というほどではないが、文也先輩からは初めてにしては上等だとほめてもらえた。

文化祭が終わつた翌週。

俺が登校すると、とてつもない事がおきていた。

「」「これは……」

それは下駄箱に入りきらないラブレターと思われる数々だった。

そして、その一通一通の内容を読んで俺は愕然とした。

”今回、女装を拝見して一気にファンになりました！ あなたをお姉さまと呼ばせてください。いえ、呼ばせていただきます！”

”祐介さん、あなたこそ真の女性です！ 今度良かつたら一緒に買いたい物に”

”新しいお姉さまが誕生して、わたし感激です！ わたしの方が年上ですが、お姉さまって呼ばせてもらいます！”

「な、なんだこれはあああああ！」

俺のお姉さま生活はここからが始まりだつた。

おまけ。

俺が廊下を通り、ファンクラブの子たちに囲まれる。

「お姉さま！ 文化祭は感激でした！」

「もう、わたしお姉さま一筋で生きていきます！」

「お姉さま、今度わたしの得意なレアチーズケーキを食べてください！」

「ああ、お姉さま！」

……。

」、これが先輩の言っていたことだったのか。

先輩のように堂々としていたいのは山々だったのだが、あまりの圧倒に俺は思わず叫んでいた。

「俺は男のはずなんだあああああああ！」

俺の叫びはむなしく校舎に轟いたといつ。

## 第四話・理不尽な依頼・バーレーボールで女装!?

俺はその日もファンレターを一通一通見ていた。

”お姉さま、いつも遠くから見ています。もつお姉さまはお姉さまにしか見えません”

”この前、お姉さまを街で拝見しました。凜々しいお姉さまのお姿が見られてわたしは幸せです”

”お姉さまの…”

「はあー」

俺は複雑な思いをため息という形で吐き出す。

だつてさ、考へてもみてくれ。

ファンレターやラブレターの類など貰つたことのなかったのに、いきなり貰うようになつたんだ。

ちよつとは嬉しいだろ?

しかし、その内容は喜んでいいのだろうかと悩んでしまつ。あの女装は俺の意思だったのは確かだし、やるなら先輩のようと思つていた。

そして、男としては悲しきことだとも思ひ。

だから複雑なんだ。

「よ、お姉さま」

「ああ、佐々木か…」

俺の前の席に座つたクラスメートが挨拶をしてくる。

佐々木利一。普通の男子高校生である。

たぶん、この高校では俺以外の男は、普通の、男子高校生だらう。

「お姉さま、どうかしたのか?」

「下駄箱に入りきらないファンレターをもらえて嬉しいんだけどさ

…

「お姉さまってのが辛いってどーか?」

「そりなんだよおー」

俺はそう言うと机にうつぶせる。

顔だけを上げて、佐々木を見ると俺のファンレターを読んで…笑つていた。

「あははは！ いつ読んでも傑作だよな！ お姉さま、だぜ！」

「なあ、俺が今、悩んでいるって言つたばかりだよな？」

「それとからかわるのは別だ」

「最悪だ。」

だが、俺の味方もいるわけで。

「お姉さまになつてこというんですか！」

「そうです。わたし達のお姉さまをいじめないで下さい…！」

そういうのはファンクラブ親衛隊の女の子達だ。

ああ、そなんだ。俺にはファンクラブ専属の親衛隊が取り巻いている。

下駄箱で俺が拾いきれないファンレターを丁寧に袋に入れてくれる。そしてそれを持って俺の教室まで来てくれるのだ。

授業中は当然来ないが、昼休みは俺が友達と昼食を食べている後ろでちやっかり食べていた。

ちなみにうちのクラスの女子の半数はファンクラブのため、この子たちを注意する人はいない。

今やファンクラブの実権は先生達をも凌いでいるのだ！

「…お姉さま？ 突然立ち上がりつてどうなさつたんですか？」

「あ、いや…。なんでもない」

俺の解説に力が入つてしまつたらしく。

無意識に立ち上がつてしまつた。

「それよりお姉さま」

「ん？ なんだい？」

ああ、もう俺はこのお姉さまと言ひ呼び名になってしまった。  
もう俺は戻れない世界に足を踏み入れていたのだ。

「お姉さまにお願いがあるんです」

「お願ひ？」

「はい、実は」

8

2

「というわけなんです」

「ちよ、ちよ」と待った。それで俺がその試合に立てるのか?」

卷之三

俺は必ず突つ入ん

۱۸۰

いや、何があつたかと言つてやうだな簡単に言おう。  
俺が女装してバレー ボールの試合に出るつて事なのだ。  
で、どうしてそんなことになつたかと言つと…。

今回はギニ=「スンバー」が一人怪我をして出られないと云ふのだ

「おまえが一ノ瀬城をめぐらす御用事は二つある。」

「お願いします！」  
我が校のバレー部のためです！」

いやだから！ それでなんで俺が女装しないとならないんだよ！」

そりあ女がなみ他にもいるんだ！

「我がファミクラブの決定事項です」

「納得できない！」

つていうかそんな決定事項認めていいのか！！

文世お姫さまが立派な支持を得ています。

卷之三

というか先輩はやれと！？

ううう。先輩の指示となると断るに断れない。

お姉さまよろしくして下れ

先輩が言うんじゃ仕方ない！」

何が仕方ないんだわ！」ついで、「おのれの際無視だ！」

そうとやうや。

俺は文也先輩のよつこ。つべ。そのためなら一肌でも一肌でも脱げりじやないか！

俺の気合は遠く、文也先輩にも届いたそうだ。

そして。

「まさか、お兄さん方まで来ているとは……」

俺は例の女装専用教室に来ていた。

試合は我が校の体育館。

そして、向こうは俺の存在を知らない。だからこそ、俺がこの教室で女装をして出て行こうと思つたのだ……。

「祐介君。何を言つているんだい？ 文也が来る以上、俺らも一緒にだ！」

お兄さんがそう言つて振り返ると、女装セッティングチームのメンバーが吼えた。

教室の窓が割れんばかりに振動している。

「そうだよ。祐ちゃん！」

「せ、先輩！？」

そこにいたのはなんとチアガールに女装した先輩だった。

黄色いノースリーブのシャツに、膝丈よりやや短めのミニスカート。

そして肩までのセミロングのウィッグを被つていてとても魅力的だつた。

先輩はその場で一回転してこいつ聞いてきた。

「似合ひっ？」

「似合ひすぎますーって言つかなんで言葉使いまで女なんですか！」

？」

俺の言葉に先輩の目が光つた。

「ふふふ、甘いよ祐介君！ そうよ、理事長の娘の処分以上に甘い

わ！」

「つて、そのネタ古すぎです！」

「まあまあ、祐介君。なんで女言葉が必要かといふとだな。バレー  
ボールでの掛け声が必要なんだ！」

先輩の代わりに先輩のお兄さんが答えた。

「なんですか、それは！」

俺が身を乗り出す。

「バレー ボールといえば。”それー”とか”はいー”とか可愛ら  
しい声が飛び交うだろ？！」

「まあ、それはそうですが……」

「ちょっと古い氣もしなくもないけど、あながち間違いじゃない。  
「それなのに一人だけ”行くぞお！”とか”おうー”などと言つて  
みろ。一発で女装がバレるじゃないか」

「うつ……」

た、確かに女装はバレるとまずいだからと言つても女言葉だなん  
て……。

「ほらほら、練習だ」

「つて、いつの間に！」

俺はすでに女装が完了していた。

先輩と同じくセミロングのウイッグでポニー テールになつて  
いる。それから何故かヘアーバンド。

胸は少し小ぶりの付け乳房が付けられていて、一年生らしい感じ  
になつていて。

極めつけは服装だつた。

「なんでブルマなんですか！？ この学校はハーフパンツですよー！」

「いいんだ。学校の許可は得ているんだから

「そ、そんなあ～」

俺は改めて鏡の前に立つてみると

白い体育着の上着に、右上には”杉田”と書かれたネームが入っ  
ている。

そして下は体育着をインした状態でブルマが穿かされていた。ちなみに色は紺である。

最後に白いハイソックスだ。

「こ、これは恥ずかしすぎますよ…」

「じゃあ、ビー・チバレーどどっかが良かつた?」

そういうと俺の前には何故か合成された俺の写真が…。

「この絵は恥ずかしすぎてコメントできない…！」

これならこっちの方がマシだよな…。

って言つか、俺嵌められてる…?

「と言う訳だ。俺も付き合つてやるから練習だ!」

「は、はい…」

俺は力なく頷くのだった。

当曰。

わたしはバレー部の中に入っていた。

え？ なんで女言葉かつて？ それは身も心も女になり切るのが女装の極意だ！ って先輩から言われたからな。

だから、俺…じゃなかつた。わたしは女のつもりでいるわけ。

ちなみに酷いことに、わたしだけ何故か体育着にブルマを穿かされてる。

周りの女子部員は全員ユニフォームでハーフパンツなのに…。

これは恥ずかしい…。

「お、お姉さま！ 可愛いです！」

「お姉さま！ 頑張つてえええ！」

「ファイトです！ お姉さま！」

わたしは異様な応援に包まれる中、応援に来ているファンクラブの子達に手を振つてみる。

「きやあああ！ お姉さまがわたしに手をふつてくれたわ…！」

「違うわ… わたしよ…！」

「お姉さま… 後で一緒に写真を…！」

凄まじい歓声に、バレー ボールの応援に来ているのか、それともわたしの女装を見に着たのかさっぱり分からなくなつた。

「みんな、今日は助つ人だけどよろしくね！」

「祐ちゃんがいれば一〇〇人力よ！」「

「お姉さまがいれば負けませんわ！」「

「よろしくね、祐ちゃん！」「

そういうとみんな、わたしと握手を交わす。

「それじゃ、今日は絶対勝つわよ！」「

「おおおー！」

わたし達はそういうと試合の開始の笛がなるのだった。

結果はわたし……じほ、じほ。

改めて……。

結果は俺達の勝利で終つた。

しかし、身も心も女になり切るのは正直大変だった。

さつきみたいにいきなり女言葉が出てくるために修正するのが大変なんだ。

で、試合の流れなんだが、俺は結局男つてこともありサーブでだいぶ点数が取れた。

相手チームのエースすら俺の重いボールに手こずりなかなかボールが取れないのだ。

そして、何よりもファンクラブの子たちの応援が殺人的なのだ。

一部紹介しよう。

「お姉さまに当てたりしたら殺すわ！！！」

「お姉さまが取り易い球を打ちなさい！！！」

「お姉さまのためにみんな死んでください！！！」

以上。

いや、これ以上は精神をきたすため紹介できないのだ。

何せ、試合が終る頃には相手チームの女子はぐつたりしていた。

試合の疲れというよりも気疲れと言つのが一番いいだろうと思つ。

それくらいファンクラブの応援（妨害とも言つ）は凄まじかつたのだ。

ともかくそんなこんなで無事（だつたのは俺達だけ）、試合が終つたのである。

おまけ。

それは試合の終つた次の日である。

俺が教室に入つてさあ、授業の準備をしていたときだ。

「そ、それは何だ！！！」

俺が見たのは隣の女子が俺のブルマ姿で必死にボールを取りうとするシーンの下敷きを持っていたところだ。

「ああ、祐介君。これいいね～わたし女の子だけどほれちゃつた」  
そういうながらつつとりした目をする女子。

この女子はファンクラブの子じゃないんだが…。  
これだと…。

「お姉さま……！」

「サインを下さい……！」

地響きを立てて、俺の回りにやつてくるファンクラブの子達。  
その手には様々なバリエーションの下敷きが…。

「この下敷きにぜひサインを！」

そういう一人のファンクラブの子をが取り出したのは俺がボールを待ち受けている姿だ。写真はアップにされていて、付け乳房で作られた胸の谷間が写つてまるでグラビアアイドルのような格好だ。

つていうか、この角度どこから取つた！？ つてかいつの間に！？  
そ、それより、こんなのが俺だつて？

認められない。

認めちゃいけない気がする！

「これは俺じゃないいつい！！！！！」

俺の否定の声は空しく教室に響くのだった。

ついでにおまけ。

「なあ、お姉さま？」

佐々木がそう言いながら俺に一枚の下敷きを見せる。

「なんだよ…。ってその下敷き！」

「いいだろう」お前、今度から女装して登校しろよ。もひその辺のグラビアよりいいぞ！」

悲しいことに男子は男子でやたらと色々格好の俺の下敷きを持っていたのだ。

はっ！まさか眞部のやつらの仕業ではないか！

「そんなもの！今すぐ回収してやる！！！！！」

俺の叫び声とは裏腹に、下敷きの回収は一枚も出来ないのであった。

## 第五話・初デートは…男と…?

わたしは駅前の時計台の下に立っていた。

薄い青のスカートに白いブラウス、上からは青系の上着を着ている。

女装チームによる力作のため、とても可愛く出来上がっていた。そのせいで何回か男の人に声を掛けられてしまつて内心は心の涙でいっぱい…。

それで、わたしがどうしていきなり女装して、しかも女の子モードでいるのかと云うと、それは三日前にさかのぼる。

その日、俺はいつものようにファンレターを読んでいた。

一応、ファンの子を大事にする」とと言つ文也先輩の指導で俺は一通一通返事を書いていた。

でも、その数は毎日五〇通はあるためとても大変である。そんな中、親衛隊の女の子が俺の田の前に立つた。

「お姉さま、実はお願ひがあるんですが…」

「何にかあつたのか?」

少し深刻そうな顔で俺の顔を伺う親衛隊の子。

それだけに俺は思わずこんなこと言つていたのだ。これが不幸の始まりとは思わずには。

「俺に出来ることがあつたら何でもするからさ」「ほ、ホントですか!」

その顔に笑顔が戻る。

俺はその戻った笑顔に頷いていた。

「それじゃ、お姉さま。実はデートしてほしいんです!」「デートをして欲しい。

その言葉に俺は舞い上がり、さらこの口をしてしまつたのだ。

その結果、わたしはいつして時計台の下にいる羽田になってしまったのだ。

わたしはてつり女の子とデートすると思つていたの…。

「やあ、待つた？」

「い、いいえ。まだ来たばかりです」

わたしの目の前にいるのは大学生の男の人。  
この前のバレー ボールの試合で一目ぼれされたらしく。  
そのせいでわたしは女としてデートする羽田になってしまったのだ。

抵抗はしたんだけど、文也先輩まで乗つてくるとわたしに逃げ道はなかつた。

「（先輩…。ちゃんと見張つて下さによー）」

わたしは文也先輩が近くで待機してくれているところとで、我慢していた。

「えっと、名前は祐子だよね？」

「は、はい…」

本当は祐介なんだけど、祐ちゃんって呼ばれていたのと女の子としてと言つ事もあってわたしは今日限り杉田祐子として過ごすことになつていた。

「滝沢さん、で合つてますか？」

「OKOK。それじゃ、祐ちゃん。どこから行こうか？」

そう言いながら滝沢さんはわたしの手を握つて来る。

わたしはこゝう体にわーっと鳥肌が立つのを感じていた。

本当は…。本当は男なのに！ どうして男とデートしなきゃならないのか…！

わたしは心で涙を流すと手を引かれながら映画館に行く。  
最近、女子高生の間で流行している赤い糸の恋という話。  
赤い糸をテーマにした切なくも暖かなラブストーリー。  
ラストがまた泣けるシーンで、わたしは思わず泣いてしまった。  
映画を見終わって、ロビー。

「祐ちゃんつて、涙もろいんだね」

そう言いながら滝沢さんがハンカチを出してくれたけど、わたしは自分のというか文也先輩が用意した女の子のハンカチで涙をぬぐう。

ちなみに滝沢さんは汚すと悪いからって断つた。

わたしとしてはあまり男の使ったハンカチを使いたくなかった。

それからわたしは滝沢さんと昼食をとる。

ふふふ。この時間だけはわたしは楽しみにしていた。

だつて、食事はおごるから遠慮しないでつて言ってくれたから。

ウェイトレスの人�이来て、メニューを聞いてくる。

「俺はサーロインステーキセットを。祐ちゃんは？」

「わたしも同じので、ガーリックソース。あと大盛り。ポテトフライにチキンバー、デザートにミラクルスペシャルデラックスパフェで」「か、かしこまりました。復唱します。サーロインステーキのセットを…」

ウェイトレスの人が去ると、滝沢さんはわたしを見てこういった。

「結構食べるんだね。俺、そういう子好きなんだ」

…しまった。墓穴を掘つてしまつた。

わたしは敢えてこうすることで、わたしに引いて諦めると思つていたんだけど逆効果だった。

ちなみに注文したものを難なく食べるんだけど、その食べっぷりに更に惚れたと言われる始末だった。

その後、いくつかお店を回つたりすると時間はもう夜の八時である。

そしていつの間にかわたし達は人気の少ないところに来ていた。

「今日は楽しかったね」

「え、ええ…」

二人並んで道を歩く。

だけど、何か緊張する感じだ。

このシチュエーション、嫌な予感がする。

「祐ちゃん

「きや」

わたしは小さい悲鳴を上げる。

滝沢さんに抱きしめられていたから。

「な、何するんですか！」

わたしがそう言いながら力いっぱい引いて離す。

普通の女の子なら引き離せないけど、わたしは一応男だ。だから力いっぱい相手を押すことで引き離せた。

「祐ちゃんは力もあるんだね…。ますます気に入つたよ」

誰か目の前の男を何とかしてくれ！――

わたしはそう思いながら抱きついとする滝沢さんから逃げる。

「ふふふ、いつまで逃げていられるかな？」

「な、何か趣旨が違つてません？　それに俺は男だ！」

もう我慢が成らない！

俺は女の子モードを解除した。

「そんな嘘だとバレバレなことは言ひなつて  
しかし、信じてもらえない！？」

俺が、男だつて言つても信じてもられないって当たり前か…。  
いつもみたいに完璧な女装だし…。

俺があまりに逃げ続けるものだから滝沢さんは何か変になつた來た。

「う手つきもいやらしいといつかなんといつか…。

つて、文也先輩はいつ助けに入つてくれるんですか！

そんなことより、どうして周りに人が誰も居ないんだ！！！

俺はいろんな意味で泣きながら逃げる。

そして、俺はとうとう滝沢さんに捕まつてしまつ。

「もう逃がさないよ」

「離せ！　このやろー！」

向こうも本気なのかこっちが思いつきり力を込めてもびくともしない。

こんなとき、俺が小柄なのがホント悔やまれる。

「祐ちゃん…」

そういうと滝沢さんが顔を近づけてきた。

「こ、これはまずい！

キスするつもりだ！

俺は何とかして滝沢さんから逃れようとするけど、しつかり捕まえられていて逃げられない。

「くそ、この変態！ やめろ！」

いつも相手を怒らせれば、やめてくれるだろうと思つて叫んだ。だが、効果はまたしても逆効果で。

「いいね、その抵抗が堪らないよ

そういうて、さらに力をこめてくる。

もう、滝沢さんの唇が目の前に迫ってきている。俺のファーストキスが…。

何も抵抗できない。もう、目を瞑るしかなかつた。

父さん、母さん、ごめんなさい。

俺は男なのに男に唇を奪われてしまします。

そうやって諦めた時だった。

ゴーンという低い音と共に滝沢さんが転がつていた。

「た、助かった？」

俺はそういうとその場に座り込んでしまう。

顔を上げるとそこには文也先輩と親衛隊の子がいた。

「すまん、すまん。うっかりはぐれて探すのに手間が掛かつた

「お姉さま、大丈夫ですか！」

親衛隊の子はそういうと俺に抱きつく。

そして、しきりに「めんなさい」を連発していた。

俺は、親衛隊の子を抱きしめてあげると大丈夫だよと黙つてあげるのだった。

その後。

俺は帰り道を文也先輩と帰っていた。

ちゃんと男用の着替えを用意してきてくれていて、俺はトイレで着替えたのだ。

あ、トイレと言つても多目的トイレ。

さすがにあの格好で男子トイレに入る勇気はなかつた。

なにせ男に襲われるようなところだったのだから。

「全く、本当にキスされるかと思いましたよ～」

「悪いな。でも、なかなか体験できることが体験できたじゃないか」

「冗談じゃないです！　俺は男ですよ？　男にマジでキスされたなんていつたらシャレにならないっす」

そう文句をたれる俺。

しつかし本氣でやばかつた。

あともう少しで俺のファーストキスは男に奪われるとこりだつたんだからな。

親衛隊の子も泣きながら謝つてたつけ。

とりあえずミッションコンプリートだ。

「しかし…。あのシーンはなかなかおいしかったな…」

俺の隣で文也先輩が小声で呟く。

小声だつたから俺は前半を聞き逃したけど、それが間違えだつたのを後で知ることになる。

「何がおいしかったなんですか？」

「あ、いや、あのレストランのサーロインステーキだよ」

「ああ、確かにあのステーキはうまかったですよ」

こつして、俺の女装でデートな一日が終わりを告げていく。

おまけ。

翌日。

俺は登校して昨日の文也先輩の小声の意味を知ることに成る。

「お、お姉さま……これはどういたしましてか！」

「わたしのお嬢ちゃんの頭が……」

「お母ちゃんは大丈夫なんですか？」

お姉さんは玄関で止まらなかった。彼女は、

そう、迎えてくれ」「アシングルの子達をなためなから俺は何かあつたのか聞いてみる。

そうすると一枚の写真が…。

それは俺があの滝沢つて男にキスされそうになつて観念したとき

の豆真たてた

二で  
なんて真か？？

そこで俺は又せ先輩の「声の意味」に気が付いた

俺の叫び声は構内にどどろいたという。

はファンクラブの部屋。

「お姉さまのあの時の顔が…あまりに可愛くて」

確かに、この施設を脱出するには……」

例の親衛隊の子もしつかり写真を持つていて、他の親衛隊の子と  
者二写真三眺つ一一一二二二二。

一緒に写真を眺めてしたらしい

## 第六話・ダブルスは女装して…？

女子テニス部。

その伝統的な白いコートフォームのウエアで、ミニスカートはやっぱり男の憧れだ。

ゆれるスカートから見えるスコートが男の目には保養にも毒にも成りうる。

「お姉さま、ニヤニヤしながら女の子のお尻を眺めないで下さい」俺は少し遠目でテニス部の練習を眺めていると、親衛隊隊長がそう言いながら俺の隣に座る。

名前を桐原なおという。

同じ一年生だ。

一年生でありながら俺の親衛隊隊長を勤める。

「いいじゃん。俺だつて男なんだ」

「ここ最近、なおとは仲が良かつた。

お姉さまとして扱いを受けなければ恋人候補とかにしたいくらいだけど、なおは俺をあくまでお姉さまとしてしか見てくれない。

この現実はとても悲しい…。

「まあ、いいです。お姉さまにも着もらつコートフォームですしで、何気なくとも無いことを言い出すのもこの隊長なのである。

「ちょっと待て！ 今度はテニス部に助つ人がいるのか！」

「はい、お姉さま」

極上の笑みを浮かべてそう告げるなお。

聞きたくないが、一応これも聞くことにしてみた。

「これもファンクラブの？」

「決定事項です」

「そんなもん！ 決定するな！！

俺の心の悲しみは誰にも分かつてもらえない。

ああ、俺の男としての青春はどこへ行ってしまったのだ。

「と、言つたわけで祐介や。早速テニスの特訓よー。」

やうごうの超が付くほどのリノリの文也先輩だ。

白いウエアに身を包んで、お決まりのピンクのヘアーバンドをつけている。

どうして、この人はここまでノリノリなんだらう。

文也先輩は尊敬してるけど、けど…。

俺、尊敬していいのかな?

それにも先輩、綺麗だな…。

「ふみ姉さま!! 最高です!」

「ふみ姉さま! あとで一緒にお写真をー。」

「ゆう姉さま! 可愛いですー!」

「ゆう姉さま! 一回転してくださいー!」

テニスコートの外にはファンクラブの子達が詰め掛けてきていた。ちなみに俺の格好も白いテニスウェアだ。

髪は今回ポニーtailで、先輩と同じくピンク色の髪留めを使つてゐる。

着替えてから鏡を見たとき、ちょっと俺自身がやばかった。

思わずその場で一回転して、自分で赤面してたし…。

ううう。自分がこんなに可愛いと男として恥しそぎるよ…。

で、俺の文也先輩が一緒になるとお姉さまとこうと被る上に、文也お姉さまとか祐介お姉さまでは言つて難い上に可愛くないからと「ふみ姉さま」と「ゆう姉さま」と言つことに成つたらしい。

「あー先輩。俺達…」

「祐ちゃん! 男言葉はダメでしょー!」

あ、そうだった。俺…じゃない、わたしは今女装してゐるから女子になりきらないとならないんだ。

うつかりしてたわ…。

でも、わたし…って言葉が慣れてきそうで最近怖いんだよね…。

「気を取り直して…。先輩、わたし達なんでテニスなんてしないとならないんですか？」

そうなのだ。

実はテニスウェアに着替えさせられたのはいいんだけど、どうしてこんな事になつていいのか説明を受けてなかつたのだ。

だけど、その内容があまりにひどいものだった。

「祐ちゃんのテニスウェアが見たかつたから」

「先輩の…」

わたしはテニスボールを上に上げる。

ボールは一度頂点に来ると落<sup>ト</sup>して来た。

そこをわたしが思いつきりサーブを打ち込みながらいうんだ。

「ばかああああーーー！」

わたしのサーブはテニスコートを通り過ぎて、フェンスの網にめり込んだ。

その後、わたしはちゃんとした説明をなおから聞いた。

と言つが、なんで始めに説明をしてくれないの？

わたしは説明を聞きながらそんな不満を思つていた。

「と、言つわけで今回、ふみ姉さまとゆう姉さまにダブルスをやってもらいます」

「…。いつも思うんだけど、わたしって何でも座じやないんだけど

…」

何でも、今度インターハイを掛けた試合があるらしいんだけど、その練習相手にわたし達が選ばれたらしい。

理由は、一応男だから。

だつたら男としてやらせてくれてもいいじゃないか…！

つと、ちょっと男言葉が入っちゃつた。

「おかげで祐ちゃんのテニスウェアが見れるからいいじゃな<sup>つ</sup>」  
「口二口顔の先輩はそういうながら頷いている。

先輩はすっかり女の子。

わたしも本当は見習わないといけないんだよね…。  
でも見習つていいのかな…。

「そう言えば、どうして男子テニス部に助けてもらわないの？」

「そう。引っかかるのはそこだつた。

単に練習をしたいなら男子テニス部を相手にした方がいいに決まつてる。

なのにどうして、わざわざわたしが女装してまで？

「簡単です。男相手だとその田がいやらしくて女子には毒なんです」

「わたしだつて男よ？」

「お姉さま方はいいんです。可愛いから…（ぱつ）」

何？ ぱつて何？

結局、それが一番メインなんじゃないの？？

わたしはその疑問が一番大きかつた。

練習が始まった。

わたしと文也先輩チームと、インターハイを田指す女子チーム。

「いくわよ！」

文也先輩がそう言いながらサーブを打つ。

バシュ！

風を切る鋭い音と共にボールが一瞬で見えなくなる。

そして、そのボールを女子チームの女の子がボールの速度と負けじ劣らずの速度でボールに追いついて打ち返した！

そのボールの速度も凄まじい！

わたしはバッティングセンターで一三〇キロのボールを打つたことがあるけど、比較にならない！

でも、わたしだつて何も出来ないままじゃ情けない。

ボールを打つた位置、彼女の予想腕力とタイミングを計算。

わたしは瞬時にボールの落下位置を計算すると、その場所で思いつきリラケットを振りぬく。

「はあああ！」

わたしの気合を込めたラケットがボールを捉える。だけど！

「お、重いいい……」

ラケットがミシミシと音を立てる。

とても持ちそうに無い。だけど、それで終らすわけには行かなかつた。

わたしは更に気合を込めるとラケットを振りぬく。

「やああ！」

わたしの放ったボールは炎を纏ながら相手コートに落ちていく。その瞬間、あまりの威力にボールがコートにめり込んだ。

「はあ、はあ、はあ……」

まだ、たつた一球目なのに恐ろしい体力を消費していた。

「さすが、ゆう姉さま…。悔れません」

そういう女子がラケットを回しながら再び構えなおした。

その後、某テニスマンガ並みの白熱した試合が続いた。

俺は当然、そんな試合について行けるはずも無く…ということも無く、普通にラリーが続いたのだ。

でも、失念していた。

俺はあの時テニスウェアを着ていたのだ…。

翌朝、俺が登校するとある教室に行列が出来ていた。

その教室はファンクラブが仕切る教室。

そこから嬉々として下敷きを持つて帰る生徒達。

ん？ 下敷き？

まさか！

俺は慌てて一人の女子に話しかける。

「ねえ、君、その下敷きは？」

「あ、お姉さま！ これですか？ どうぞ」

その女子は嬉しそうに見せてくれる。

そして俺はその下敷きを見て、わなわなと震えていた。

そこにあつたのは俺がボールを返すワンシーン。

当然、激しい動きをするからスカートもゆれる訳で…。

その、恥ずかしくて言いにくいんだけど、俺のスコートが丸見えなのだ…。

ちなみに自分で言うのは悲しいが、何故か自分でもグラビアか何かと勘違いしそうだ。

「な、なあ。ちなみにこれつていいくらで売られてるんだ?」

思わず気になって聞いてみる。

「高かつたんですよ~ 一枚千円もするんですから~」「高っ!!

ファンクラブ恐るべし!

「そ、そつか、ありがと~」

それから他の女子にも声を掛ける。

結果…。

ラケットを構える俺。（いい絵である）

打ち返す俺。（最初の子に見せてもらつたもの）

サーブする俺。（サーブの際にスカートが捲くれてる…）

転ぶ俺。（やっぱリスカートが捲くれてる…）

ハイタッチをする俺と先輩。（純粋にいい絵になつてる）

ラケットを取りこぼして手を押される俺。（何故か色っぽい…）

と様々な下敷きがあった。

…。

俺、男としての資質なし？

先輩を田指し始めて今更気づいた事実だった…。

…。

## 第七話・男とじり？ お姉さまとじり？

「好きです！ 付き合つてくださいー！」

俺の田の前にいるのはファンクラブの子の一人だ。制服のブレザーに校章の下にあるファンクラブのバッジが付けてあるからな。

「えっと…。俺、男だよ？ それ分かって言つてる？」「はー！ お姉さまは男ですか！」

「で、その好きって言つのは？」

「もちろん、お姉さまとしてですー！」

これなのだ。

最近、俺に告白してくれる子が多いのは嬉しいんだがどうのことなどが『お姉さま』としてなんだ。

いや、俺を『お姉さま』としてみていくとしても告白せ嬉しいんだ。

だけど、男としての俺が悲鳴を上げているんだ。俺は男だと。

女として付き合つて違うだろ？ って。

「それで…。どうでしょ？ つか…？」

恐る恐る俺を見るファンクラブの子。

見た目はまあ可愛くほつだと思つ。

性格は分からなければ、悪くはないだ。

でも、俺がここに付き合つて言つても、お姉さまとしてだ。きつとテートも女装してお買い物とか言つんだら？ そこまで考へて俺はこう言つた。

「俺と付き合つて他の子はビリするんだ？」

「え…？」

「いやな。君や、俺をお姉さまとして見てるなら、れつて抜け駆けじゃん？ どうのかなつて」

そこまで言うとその子の顔が青くなつていぐ。

まあ、これは仕方ないこと。

「」の子自身が撒いた種だ。

すぐに芽が出る。

「そこお！…」

ほら来た。

「抜け駆けは禁止事項よ…」

やつて来たのはなおだ。

親衛隊隊長がダッシュしてやつてきた。

「わたしがトイレに行つてゐる間にすみません。お姉さま」

「いや、いいんだけど…。ねえ、君。そういうことなんだ」

「わ、わたし…悪気があつたわけじゃ…」

「みんなね、最初そういうのよ…。あなたたち」

そういうとなおの後ろからざつと残りの親衛隊が現れる。

「はい。隊長、何ですか」

「」の子をファンクラブ室へ。会長に事情を話して

「わかりました。行くよ」

「」ごめんなさい！ 許してください！」

親衛隊に引きずられながら哀れなファンクラブの子が俺の前から連れ去られていく。

「なあ、なお」

「はい、お姉さま」

「ちょっと厳しくないか？」

「いいえ。」ファンクラブ規約第一章禁止事項第三項お姉さまへの告白について”に違反している以上は例外は認められません

「そ、そうか…」

いつの間にそんな規約が出来たんだろつな…。

気になるのは第二章が禁止事項、だと第一章は何だろ？…と嘆息

と。

ファンクラブの規約は知らないんだ。

「規約つて全部で何ページあるんだ?」

「一〇三ページです」

「一〇〇ページもあるのかよ…。」

恐るべしファンクラブ。

そして、恐るべし俺の美貌…。

つて、美貌つて?

美貌つて何なんだ!

「あ、あのお姉さま? 頭を抱えてどうしたんです?」

「あ、いや。何でもない」

俺は頭を振ると美貌と言葉を消去する。デリートする。//

箱ぽいだ。

「あの…」

「なに?」

なおが少し顔を赤くしながら俺を見る。

また何か変なお願いがあるんじやないだろ? つか…。

「今度の日曜日暇ですか?」

また、男とデートだろうか?

「空いてるけど?」

「そうですか! それじゃ…」

なおの言葉に俺は驚きのあまり声を失った。

日曜日。

珍しく俺は男の服装で駅前に立っていた。

先日、なおにわたしの家に来ませんか? などと誘われてしまつたのだ。

俺がまた女装して行くのか? と聞くとその必要はありませんと。

「これって、デートだよな? …しかもいきなり女の子の家つて

俺は舞い上がつてしまつていた。

だつて小学校から女の子から同姓扱い。

中学でも。

「可愛いけど、彼氏じゃね…」

とか言われ続けていた俺が女の子とトークなんだ！

「良かった…。ようやく男として見られるよつになつたんだ…」

俺は今日ほど男として生まれてよかつたと思つことはない…と思つた。

「お待たせしました！」

振り返るとそこには赤いシャツに白いスカートを穿いたなおが走ってきた。

いつも制服姿ばかりだったが、いつして改めてみると可愛い。「いや、まだ来たところだから」

実は楽しみで一時間も前から来ていますなんて言えない。

絶対にこんな事ないと思つてたのに、嬉しさのあまりなかなか寝付けず、しかも家をかなり早く出でしまつたのだ。

「それじゃ行きましょう」

「ああ

俺はルンルン気分でなおの家に行つたのだ。

なおの家はなかなか大きい一戸建てだった。  
ざつと見ても六部屋はありそうだ。

「なおの家つて大きいんだな

「そうですか？」

きつとこの子にはこの家が普通なのだろう。  
俺の家なんか三LDKだ。

決して小さくないけど、いじはその倍はある。

「ただいま～連れてきたよ～

連れてきた？

「どうということだ？」

「お邪魔します」

俺はとりあえずそつ言こながらなおの家に上がる。

その時、俺は気が付くべきだった。

何やら靴が多いことに…。

俺が通されたのはリビングだ。

そこには、なおのお母さんらしき人。

らしさ、と言つのは若くて綺麗なのだ。

でも、お姉さんと言つには年が行つているよつこも見える。

「なお、なお。あの人はお母さんか？」

「はい。そうですよ」

小声で尋ねると肯定が帰つてきた。

しかし若いよな…。

「祐介君だったわね？」

「あ、はい」

「女性をじろじろ見るものじゃないわよ？」

「す、すみません。若そつだなつと思つたもので」

「若いわよ。わたしまだ三三歳だもの」

「あ、そつなんですか……。つて三三歳ですか！」

三三歳つて、どうこうことだよ？

俺達が今年で一六だぞ？

なおは一六の時の子供だつて言つのか？

おいおい、待てよ。

そんな一六の時に子供を作るよつな感じには見えないんだが？

「祐介君。表情でだいたいわかつちゃうわよ？」

「す、すみません」

「まあ、いいわ。今日は手伝つてしまつことがあって、なおに頼んで呼んだの」

「手伝つことですか？」

「そうよ」

そう言つてお母さんは内容を話し始めた。

そして、俺は愕然とした。

なぜなら、モデルになつてほしいといつのだ。

何でもなおのお母さんはファッションデザイナーらしいんだけど、

この前専属モデルが入院してしまつたらしい。

他のモデルを探したところマッチする人がいなかつた。

そして、なおから女装すると綺麗な男の子がいるといふことで俺

九

！  
！  
なお！  
僕を裏切ったな！  
みんなと同じで僕を裏切ったんだ！」

つと某アニメのような叫びは置いておいてだ。

「俺、一人じゃメイクとか無理ですよ？」

あら 爰属の人かながいるんでし、お手買ひでるね。

その間で何が出来たのか見えていた。

結局俺は先輩達の手によつて女の子にされてしまつた。

今日のチャックは茶髪のセミロング。

今日に付の手紙が出来てゐる。一月三日午後二時頃に起きて、いよいよ

しかも、しかも

ブルマはまだ体操着などと言う概念だつたし、スコ

リーフたつた

でも、今日は着たる。

「ハ、痛いんですが

サポーターの締め付けがきつすぎて痛い。

もう少しきついと男として危ないんですね。

我慢してね。」「

可か布カフのノど。

「それにしてもよく出来てるわね…」

そう言いながら俺に付けられた付け乳房をいじって楽しむ。別に神経が繋がっているわけじゃないからいいけど…。

何か汚された気分だ。

「で、始めに着るのはどれですか？」

「まずこのワンピースからかしら?」

そう言つて取り出されたのは赤いワンピースだ。  
最近、ここまで原色のワンピースつてあるのだろうか?  
それに袖を通すと、俺は移動する。  
そこは撮影スタジオになつていた。

「じゃあ、ポーズってね」

お兄さん達にそう言われ、俺は指定されたポーズを取つた。  
前ががみ、少し横を向いたり、上を見上げたり…。  
体育座りをして膝に顔を乗せるとか…。

俺、男だよな?

な、なあ、誰かそうだつて言つてくれないか?

俺は久しぶりに女装に対して不安を覚えた。

それでも撮影は続いていく。

ボディースーツ（サポーターが必要だったのはこれ）や新作のキヤミソールやパジャマまである。  
スース姿に、タイトスカート。  
スポーツウェア。  
そして最後…。

「こ、これは絶対に嫌ですよ！」

「あら、どうして？ ボディースーツも着たんだし同じじゃない」

「そうだぞ。祐介君。ここは覚悟を決めないとな」

「だったら先輩が着ればいいじゃないですか！」

「今回の依頼は祐介だ」

何をそんなに嫌がつているかと言つと…何と水着なのだ。  
しかもビキニタイプだ。

しかも白！ ホワイト！

何が悲しくて水着まで着ないとならないんだよ！

「まあ、いいわ。このためにみなさんに来てもらつてるんだから」

「祐介君、君が大人しくしていれば手荒なマネをしなくて済んだんだけどな」

「俺達で着替えさせてやるよ」

「まあ、楽しもうや」

「そんなことを言いながら先輩+お兄さん方が手をわきわきしながら俺を取り囲んでいく。

「さあ、覚悟!」

「こんなのはいやだああああ!!!」

何本もの手が俺を押さえつけて服を脱がしていく。

こんなのレイプだ!

ひどい、ひどすぎる!

あんまりだあ————!!

……。

そして。

「汚されちゃったよ……」

俺は真っ白なビキニ姿でカメラの前で崩れ落ちていた。

「これはこれでいいわね」

そんな、なおのお母さんの声が聞きながら俺はされるがままに[写真]を取られていった。

[写真撮影が終つてようやく来た時の服装に戻つた。

俺はショックのあまり少し呆然としていたが、意識が戻ると帰ることにした。

「お邪魔しました……」

「今日はありがとうございました。また来てね」

「たぶん、もう来ません…。ええ着ませんよ」

俺はそう言いながらなおの家を後にした。

帰り道、俺の横にはなおがいた。

「あの、お姉さま」

「なに…」

俺の周りは絶対零度の空気が漂っている。

超を通り越すほどのブルーだ。

しばらく男の手が怖くて仕方ないだろうな…。

「その…。『めんなさい』

そういうとなおが頭を下げて謝った。

「いいよ…。お姉さまだから…」

俺がそういうとなおが抱きついて来た。

「なあ?」

「『めんなさい…。ちょっとお母さん強引だから』

「もう、いって

「それでも…」

なおに抱きつきながら頭を振る。

この子は……親衛隊隊長なんだなと思つた。

何だかんだいろいろと要求されるけど、お姉さまを大切にする親衛隊隊長だ。

「はあー、わかった。元気出すからさ」

そう言つて俺は自分の顔を叩いた。

肌が叩かれる乾いた音が道に響く。

痛みで少し気合が入った。

「さて、改めて行くか！」

そう言つて歩き出したとき、俺はなおに手を取られた。

それで俺は歩みを止める。

「どうした?」

「あ、あの…。わたし…」

そう言つて顔を赤くするなお。

今は純粋に可愛いと思つ。

「わたし、お姉さまとしてじゃなくて、祐介君として好きー。また告白か…。

でも、ね…。

「おいおい、いいのか？ 第一章に引っかかるぞ？」

「いいんです！ だつて、わたしは祐介君が好きだから」

「だからお姉さまとして…って、え？」

「なんていった？」

お姉さまとしてじやなくて祐介君として？

それって？

「な、なあ、それは俺を男として見てるってこと？」

「そ、そうです。わたし、お姉さまじやなくて祐介君が好きになつたんですね」

「え、えーと。これは喜んでいいんだよな？」

「は、はい！」

おいおい、本当に好きだつてよー！

男としてだぞ？

今まで一度として男として告白を受けたこと無いんだぞー！

男にマジ告白受けようつな男だぞ！

男にファーストキスを奪われそうになる男だぞー！？

「間違いじゃないんだよな？」

「もちろんです！」

「でも、どうして？」

「カツコイイから…」

「可愛いんじゃなくてか？」

「可愛いけど、カツコイイんですね！」

詳しいことは分からぬけど。

俺は男として告白を受けることが出来た！

これが再び波乱の一歩の始まりになつてしまつとも知らずに…。

おまけ。

翌週の水曜日になつて、俺はクラスメートの佐々木にある雑誌を見せられた。

「お前つてもう女確定だな」

そんなこと言って見せられたページに向といの前の写真が載つて  
るではないか！

最初のワンピースの宣伝のだ。

うわあ…。

俺つてめっちゃ可愛いじゃん…。

…。

ああ、何か悲しい。

「しかもお前、女物の下着穿いてたんだな？」

「え？」

「ほら、このページ」

そんなこと言われて見た写真。

それは体育座りをして何パターンか取ったうちの一つだ。

スカートの奥が見えるんですけど？

これははどういうことですか！？

だいたいワンピースの宣伝だろ…！  
グラビアにしてどうすんだよ！

「お前さ、男やめたら？」

「俺は、男だああああーー！」

俺の叫びは久しぶりに学校中に響き渡つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7019h/>

---

打ち碎かれたプライド

2010年10月8日13時32分発行